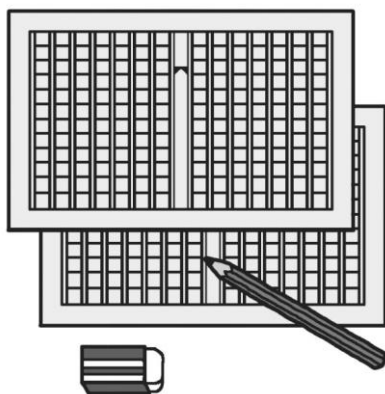


法に関する作文コンクール

受賞作品集 (平成29年度)



神奈川県弁護士会 法教育委員会

目次

法に関する作文コンクール 平成29年度テーマ

『100年後の未来と法』

100年後の未来、私たちの世界はどのように変わっているでしょうか？

100年後の未来の世界を想像してみてください。

そして、その世界ではどのような法（ルール）が必要か、あなたの考えを述べて下さい。

中学生の部

- 【最優秀賞】 人類がA I の上に立ち続けるためには…………… P 1
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校三年 塚山 草太
- 【優 秀 賞】 人間と機械の共存と法…………… P 3
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校三年 川井 もも
- 【優 秀 賞】 海上で生活する…………… P 5
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校三年 山藤 早織

人類がAIの上に立ち続けるためには

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校 塚山 草太

今回、100年後の法に関する作文を書くにあたり、100年後の世界はどうなっているのかと考えた。そこでまず思い浮かべたのは、AIについてである。近年AIの発達は目覚ましく、百年後には更なる発達を遂げているであろうということは容易に想像できる。そうした社会において人類がAIを支配する存在であり続けるためにはどのような法が必要なのだろうか。

私が考えた法案は三つだ。一つ目は「AI開発規制法」である。この法律はその名の通りAI関連の技術開発にある程度の制限をかけるというもの。AIが短期間で急速に発達した要因の一つとして企業間の激しい開発競争があるのではないかと考えた。資本主義国家である日本では自然なことであり、国の発展には必要なことである。しかしAIに関してはこのままの状態が開発が進むと、後に詳しく述べるが人間の生活や生命が脅かされる危険性があるため、例外として扱うべきではないかと考える。例えば銃火器のように国からの特別な許可を得なければ開発できないようにしたり、民間企業による開発を全面的に禁止するなどの制限を法律として制定するかどうか、世界全体で見ればAI開発の国際機関を設立し国独自の開発を禁止するといった、何らかの対策が必要ではないだろうか。この後に述べる二つの法案についてもこの法律を土台にすべきだと考えている。

二つ目の法案は「AI労働参加規制法」だ。近年では、AIが人間に変わって仕事を行う場面が増えており、2013年にはオックスフォード大学のマイケル・オズボーン准教授が今後10～20年で47%の仕事が機械に取って代わられると発表している。もしそれが現実となれば日本の失業率が跳ね上がる可能性がある。仕事を失えばもちろん収入は得られない。AIの労働参加により得をする人もいるだろうが、仕事を失った人々との経済格差の拡大という問題も考えられる。何よりAIによって仕事が奪われれば人間としての尊厳が失われるということもあり得る。とはいえAIの労働参加にはメリットがあるのも事実であり、人間とAIでバランスの取れた社会にするための法律が必要であると考えた。

三つ目は「AI軍事転用禁止条約」だ。これは世界規模での対策が必須だと考えたため条約とした。AIの技術開発が各国で進む中で、AIの軍事利用も進められており、空中戦シュミレーターで戦闘機AIが元米空軍の敏腕パイロットに圧勝したという報告もあった。今後の戦争は全てAIによってコントロールされたロボットや無人機が行うようになるかもしれない。AIが軍事利用されることによる危険性とはどういったものなのか。私は二つのことを考えた。一つは戦争という外交手段を安易に選ぶようになってしまわないかということ。戦争がAIによって行われるようになれば自国の兵を失うことなく武力行使ができる。しかし例え戦闘はAIが行ったとしても戦争である以上多くの人間が犠牲になることは避けられない。私は、AIの専門家ではないので詳しいことはわからないが、もしAIが全て自ら判断して行動する全自動の戦争となれば、人間の意志に反して大量破壊兵器が使用されてしまうかもしれない。人間同士の戦争よりも更に残虐な行為が行われる可能性がある上、戦争を人間がすぐに終わらせられるかもわからず、非常に危険性が高いのではないかと考えた。もう一つはAIがテロリストに利用されるという危険性だ。例えばテロリストが小型ロ

ロボットや小型ドローンなどを大量に用意し、それらに頭蓋骨に穴を開けたり心臓を損傷させられる程度の小さな爆弾を取り付け、「男性」や「子供」といった指示を出す。そうすると後は人が密集する場所に放てばAIが目標を判断し勝手に人を殺傷してくれる。AIの技術がテロリストの手に渡ればこうした事件が起きてしまう危険性も考えられる。AIは人類の発展のために使われるべきものであって、殺戮兵器として使われるべきものではない。軍事転用によって多くの人々の生命が脅かされる前に世界規模で対策を講じる必要があると考えている。

AIは非常に便利なものであり、正しい使い方をすれば人類にとって大きな利益となるだろう。しかし逆に使い方を誤れば人類を破滅に追い込む存在となりかねない。今回は規制するという方法を提案したが、理想は規制などではなく高度に発達したAIを人間が上手くコントロールして人類の発展に繋げていくことだ。100年前の世界からは考えられない程技術が進歩してきたように、100年後の世界がどうなっているかなど全くわからない。人類にとってプラスになるための法とはどういったものなのか。時代の流れや状況に応じて考えていく必要があるだろう。

人間と機械の共存と法

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校 川井 もも

百年後といたらどんな未来になるのか、みなさんは想像出来るだろうか。

今から約百年前に百年後を予想した（つまり今を予想した）内容の新聞記事というものが学校の社会科の授業で紹介された。その記事の中では、電話の発達や暑さ寒さを調節する器械の誕生、写真電話、電気が燃料となることなどが予想されていた。それらを、今のものや今の現状と当てはめてみると、ほぼ現代の社会では成り立っていることが多いと言っているだろう。というよりも、大半が私達にとっては当たり前のものである。

この百年、かなり多くのものが発達してきているということが分かる。今ではありえないことも、将来は当たり前になっているかもしれない。そんなことをふまえながら、私も百年後の未来を予想してみようと思う。

まず、私は百年後に、ロボットや機械が発達すると考える。今、段々と増えてきている人工知能を搭載した機械や本来は人間の仕事であったものの機械化。それが百年後になるとほとんどの地域に普及するのではないか。荷物の宅配であれば何か空を飛ぶような機械が行うようになり、宅配の機械を調整する会社はあっても人間を雇う必要がなくなるということや、人工知能が発達すれば、人間が作ったとはいえ、人工知能自体が成長し、意思を持ち人間に対して指示を出すようになるということがあるかもしれない。そのようなことになったら、やがて人間の役割というのはなくなり、機械が全てを制御する日というのも訪れるだろう。そうならないためにも、私は人間という法を人間以外のためにも設けるべきだと思う。

私が法により定めるべきだと思うのは、機械やロボット、人工知能の使用範囲だ。現代の社会では機械やロボットは介護の現場や、公共の機関、家の中などで人間を助けたり、人間の暮らしを豊かにするために使われている。その反面、戦争などでは人間を傷つけたり、殺したりすることにも使われる。自分の意思を持つようになった人工知能、ロボットがもし人間を襲ったり傷つけたりしたらもう人間はかなわなくなるし、機械自身が成長するため、すごく危険なことになる。また、例に挙げた、荷物の宅配や計算をする仕事、接客なども機械化出来そうな世の中になって来ているが、そこまで機械がこなしてしまうと人間の仕事がなくなり、人間は衰退していつてしまうのではないか。そのような面から、使用範囲を明確にし、なるべく人間と機械のバランスを保てる社会にすることが大切だと思う。

二つ目に、機械を使用している際にトラブルがあった場合、その責任の所在は誰にあるのか定める法があると良いと思う。現在、車における自動運転で事故があった場合、乗っている人が責任を取るのか、それともそのシステム側の責任になるのかということが問題になっている。同じように、機械があらゆる所に使用される未来では事故が起こることもあるだろう。正直どちらかに責任を負わせるというのは少し難しいかもしれないが、使用者とシステム側が事故の状況に応じてどちらが多くその責任を負担するのかなどを示すことの出来るような法があるとトラブルを防ぐことも可能なのではないか。

百年後の未来も今の憲法第十三条にあるように国民が個人として尊重され、幸福を追求する権利を侵されないように、人間と機械が共存出来る法づくりが大切になってくると思う。

海上で生活する

横浜国立大学教育学部附属横浜中学校 山藤 早織

最近、地球温暖化という言葉を目にする機会が多い。

地球温暖化とは二酸化炭素やフロンガスなどの温室効果ガスが大気中に放出されることによって海面上昇、異常気象などをもたらす現象のことだ。では、何故地球温暖化は起きるのだろうか？もちろん勝手に温室効果ガスが発生するわけではない。主な原因は人間にある。

それは、時代と共に発展してきた人間の生活だ。18世紀中ごろにイギリスで起こった産業革命により、生活は一変した。化石燃料と呼ばれる石油や石炭を使うようになったのだ。今では当たり前のように使える電気やエアコンも化石燃料を燃やすことで私たちは快適な暮らしを送っている。このようなことが原因で地球温暖化が深刻化している。

では、100年後の地球は一体どうなっているのか想像してみたいと思う。このままの状態でも生活し続けると間違いなく地球温暖化は人の手には負えない程、進行すると考えられる。そして海面が上昇し現在の約50%の陸地が水没すると予想できる。

100年後の日本は今の原型をとどめているかも分からない。半分以上が海と化した日本列島。大半の人が住む場所を失ったと予想できる。そこで考えられる問題は、生活用水の不足や田畑の減少、そして陸地が減少したことにより土地を巡り争いが起こることなどだ。

まず、生活用水の減少についてだ。人が生活するには水は欠かせない。お風呂に入るにも料理をするにも必要不可欠だ。だが海面上昇により、陸地が水没することで現在活用されている川の水やダムの水も海水と混ざり使用できなくなってしまう。そこで法律として飲み水を十分に確保できるように海水淡水化装置の設置を義務付ける法案が出されると思う。

次に田畑の減少についてだ。2011年に起きた東日本大震災でも津波による被害で、畑が海水に浸ってしまい、塩害の影響で作物が育たなくなってしまうと言う事例がある。除塩をすれば元通りになるのだが莫大な費用がかかってしまう。国内の約半分以上が被害にあってしまう訳だから政府も手に負えないのでそのまま放置されてしまう。

そこで私は、農作物が育てられないのなら食料を求めて人は海に出ていくようになると思った。つまり今よりもずっと漁業が発展していくのだ。だが自由に世界中を行き来されては困る。また、豪華な船を持っている裕福な人が魚を独占しないようにする法律も出されると思う。例えば、現代にもある排他的経済水域のようなもので漁ができる区間を国によって分割したり、一日当たり取ることの出来る魚の量を制限する法律などが考えられる。

最後に、土地争いについてだ。陸地が減少し貴重になると、戦国時代の時のように争いが起きる可能性が高いと考えられる。それを阻止するためには、食料の時と同じように陸地だけでなく海上に進出する必要がある。科学技術は今よりも発達しているはずなので、人が海上で暮らせる船のような機械が発明されたり、新しい島を作り出すことも可能になるかもしれない。だが勝手に新しい島をつくられても困るので、新しい島を作るにあたって国の審査を受けなければいけない法律ができると考える。例えば、居住理由や維持できる程の財源を持っているのかなど、現代で言う住宅ロー

ンの審査のようなものだ。

私は、このように 100 年後の地球は地球温暖化により約 50%の陸地を失い、人類は陸土から海上に移り住み発展してゆくと仮定して 100 年後の日本の法律を考えた。実際にこのような状況になるとは言い切れないが、今の生活のままでは 100 年後の日本の未来が危ない。便利さを追求しすぎると環境はいつか限界を迎える。その事実を国民全員に知らせるためにも法律と言うルールを今からでも作り、ある程度国民の生活を制限する必要があると私は考える。